

# 放射能健診 100万人署名運動ニュース No.20

2015年8月17日

放射能健康診断100万人署名運動全国実行委員会 HP : <http://housyanoukenko.3rin.net/>

連絡先 : 全国事務局・小山潔 070-5653-7886 nobiscum@wb4.so-net.ne.jp

## 福島県下で共通の健康被害の実態を聴き、交流(7/3~5福島激励訪問団)

7月3~5日に、100万人署名運動の事務局員を中心に8人が「福島激励訪問団」を作って福島に行きました。(詳しい報告には、パンフレット「我々はモルモットだ」を発行しましたので、ご希望の方は小山まで連絡ください。)

7/3 福島駅に集合。南相馬市へ。

「南相馬・避難勧奨地域の会」小澤さんの案内で市内各地を訪問。  
夜、川俣町・南相馬市の市民と交流会。

7/4 飯舘村、細川牧場を訪問し、村内各地を訪問。佐藤村議と交流。  
夜、福島市内で除染労働者と交流会。

7/5 福島駅前で放射能健診署名。午後、「子ども脱被ばく裁判」原告の方と交流会。

訪問団の目的は、今年に入って署名数が伸び悩み、飽和状態を感じていたので、さらに一まわり二まわり署名を広げる力をつけること。そのために2017年3月からの「避難解除」、「補償打ち切り」、「住宅支援打ち切り」など原発・放射能事故の幕引きがすでに進む福島の実態を知り、またそこで闘う人達との連帯を作ることでした。

私たちは福島で、国が幕引き・帰還政策に賭ける「決意」とその酷い事態を実感させられました。そして健康被害と闘う人たちに出会いました。

### 【南相馬市。放射能の実物を見て、汚染を実感。7月3日】

南相馬市は「帰還困難区域」から避難区域外の地域まで5つに分断され、昨年12月にその中の「特定避難勧奨地点」が解除されました。しかしそこを訪れると私たちの簡易線量計でも表示はすぐに0.5  $\mu$  Sv/h を超えました。いたる所にホットスポットがあり、その土壌の放射能は1平方メートル4万Bqを超える「放射線管理区域」に相当します。

「南相馬・避難勧奨地域の会」の小澤さんの案内で避難解除された地域から帰還困難区域のすぐそばまで市内各地を訪



7月3日、南相馬市 (MDS新聞社 豊田さん提供)

問し、放射能汚染は空間線量では把握できないこと、土壌汚染の測定が不可欠であることを実感しました。避難が解除された地区の民家の線量測定では、家の東側と西側で線量が倍以上違います。除染した後にも山から放射能の塵が風に運ばれて来るためです。小澤さんが作った地域の放射能地図には、地形によって汚染度の違いがくっきり現れ、山風の通り道に汚染が集中することがよくわかりました。また多くの家屋の雨樋の出口あたりの地面には灰色のシミが広がり、そこをβ線測定器で測ると測定値が跳ね上がります。風雨で運ばれる放射性物質がここに集中するのです。

山中に入ると空中でもβ線測定器が反応して針が振れるほど放射性の塵が舞っています。その山中で除染作業を行う労働者に会いました。ここで1日作業したらどれほど放射能を吸い込むのか？ 国も請負会社も人間の被ばくには本当に無関心だと思いました。

小澤さんや南相馬の避難勧奨地点とその地域の人たちは、「南相馬避難解除取消訴訟（20ミリ基準撤回訴訟）」を提訴し、年1mSv基準に戻せ、と要求しています。

## 【「被ばくの村」飯舘村。7月4日】

翌日、飯舘村の細川徳栄さんの牧場を訪問。飯舘村は全村が「帰還困難区域」と「居住制限区域」です。細川さんの家の交流会で佐藤八郎村会議員から、国と村長が2017年3月に居住制限区域の解除を企てていると知らされました。今50mSv/年もある地域の避難を1年半後に解除するのか?!信じられませ



7月4日、飯舘村

らんでしたが、村内を回ると除染作業が宅地と農地で猛烈な勢いで進行していました。ダンプ、ブルドーザー、クレーン車など重機が除染土のフレコンバッグを次々に農地に積み上げ、人目から隠すつもりもないむき出しの状態に、国の避難解除に賭ける決意を感じ取りました。しかも除染するのは飯舘村の面積の15%だけ。75%を占める山林などは放置され、山から放射能が飛んできて、家を除染してもすぐに線量が前より高くなります。佐藤さんは言います。たった15%を除染して帰還

させる。避難解除というと線量が下ったと思われるがそうじゃない、高線量の所に住めと言うこと。被害者が言葉を作り出して対抗しないとダメだ。「人体実験だ、我々はモルモットだ。」

## 【健康被害について】

私たちは訪問先ごとに「あなたと近辺の方に健康の異常、被害はありませんか？」と訊きました。南相馬市、川俣町、飯館村、福島市の方々の返答は驚くほど共通していました。

- ・「心臓病による突然死が増えた。」
- ・「目が悪くなった。」
- ・「飛蚊症。」
- ・「目の充血。」
- ・「関節が痛い。特に足。」
- ・「皮膚炎、じんましん。」
- ・「甲状腺がんが大人に出ている。」

そして何より「疲れる。体調が良くない」という答です。病名がつく前段階の症状としての倦怠感なら、原爆ぶらぶら病と呼ばれた原爆被爆者の症状と共通します。私たちはこれらのことを聴き、健康被害は確実に表面化し始めている、甲状腺がんだけを象徴的に問題にしている段階ではない、と思いました。

交流会では、私たちが出会った方々が健康被害を記録、蓄積する努力や、初期被ばく線量の調査をしていることも知りました。私たちは、健康被害と放射能の因果関係は立証できなくても良いから、当事者が声を上げることが重要で、特にそのことが専門家が健康被害の調査に参加しやすくする、と提案しました。このことは飯館村の佐藤村議が語った「被害者が自ら言葉を作り出して対抗しないといけない」とも共通します。私たちが取り組んできた、健康被害と健康不安を訴える公聴会の運動が力を発揮することも、福島で再確認できました。

## 【福島駅前で街頭署名／子ども脱被ばく裁判。 7月5日】

今回も福島駅前放射能健診署名を呼びかけ、2時間で126筆が集まりました。署名の内容がすぐわかるように、「やっぱり心配、放射能」「希望する全ての人に放射能健診」の看板を掲げたので、安心して立ち止まってくれたのでしょう。

署名をしてくれた市民に「健康の不安はありますか？」と訊くと、高齢者では自分自身よりも子ども、孫の健康を心配し「県外に避難させている」と答えた方が多かったです。また高校生に「甲状腺検査を受けましたか？」と訊くと大半の生徒が受けています。「この署名はあなたの父親、母親も甲状腺検査を受けられるようにしてくれ、という署名です」と話すと多くの生徒が署名してくれました。

ここに駆けつけてくれた「子ども脱被ばく裁判」原告の方と食事をとりながら交流会。この裁判は、国・県と福島市などに対して「子どもたちに被ばくの心配のない環境で教育を受ける権利が保障される事の確認」（子ども人権裁判）と、「原発事故後、子どもたちに被ばくを避ける措置を怠り、無用な被ばくをさせた責任」（親子裁判）を請求する裁判です。ところが「子ども人権裁判」の請求内容が9月に「中間判決」で門前払いにされるかもしれないと、今これに対して署名とハガキによる要請行動をしています。

Aさんは事故後、福島市内の渡利の国道115号を通行中に今までにない痛みが目の奥に走りました。子どもにも突然鼻血の症状などが出て心配で、昨年6月「子ども脱被爆裁判」の誘いにすぐ参加を決めました。

Bさんの自宅には山から放射能が流れてきて西側が0.4  $\mu$ Sv/hの高線量です。Bさんには健康被害の症状として、全身の赤い発疹や出血がありました。子どもは福島の米で反応し、今では「放射能が怖い」と外の物を触らなくなりました。

前日まで南相馬、飯館村で猛烈な放射線量を体験した私たちが、「福島市に戻って1  $\mu$ Svを下回るとほっとして、2日間ただけで福島市ではマスクも必要ない気になる」と話すと、「それが福島です」という返事。市民には慣れとあきらめ、妥協のエートスが広がっています。それでも市民の密かな抵抗のせいか、西日本の野菜を売るスーパーも出てきたそうです。

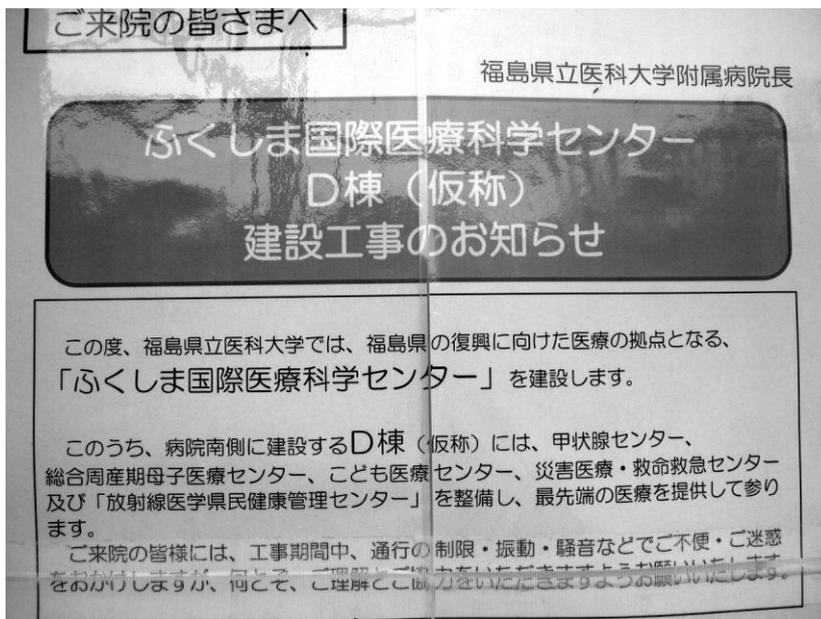
## 【福島訪問を振り返って。運動の方向】

福島訪問団はいくつかの新たな「発見」とテーマ、見通しを持って帰りました。

- ① 避難解除に向けた福島の動きは、大きな失策を犯しながら猛烈な勢いで進んでいます。年間被ばく線量が20 mSv や50 mSv の地域までも避難解除することの異常さは隠しようがありません。事実として、避難解除された南相馬の地域には今も放射線管理区域以上の汚染地点が住宅など生活の中に存在します。除染のウソがますます明らかになります。
- ② 福島の各地でいくつかの健康被害が表面化し始めています。統計で「証明」されていないが誰もが共通に感じ取る病気の多発です。訪問した各地で聴いた心臓、目、関節、皮膚などの病気を調査／立証し、可視化する方法は何か？運動にとって核心となる課題です。

一方で福島県民の健康不安の声と要求は県を動かし、19歳以上の甲状腺の治療費を県が負担する制度が、不十分さはあっても始まりました。甲状腺以外の病気のこと、県が意識しないはずがありません。そこで、被害者／県民が声を上げること、上げられるための応援が重要で、力を持ちます。

- ③ 福島で健康被害、放射能汚染、避難解除と闘う人たちとの交流を深めました。その取り組みを学びながら、放射能汚染の実態と健康被害の可視化・社会化を世論に訴える運動を準備します。



県立医大では甲状腺がんや子どものがんの増加を見越して、「国際医療科学センター」を建設中。7月5日